

2021年5月23日（日）「聖霊による愛の業の発露」

使徒 4:32-37 《聖書協会共同訳》

32 信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。33 使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証した。そして、神の恵みが一同に豊かに注がれた。34 信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、35 使徒たちの足元に置き、必要に応じて、おのおのに分配されたからである。

36 レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足元に置いた。

【序論】

毎年ペンテコステの機会を用いて、使徒言行録の学びをゆっくり継続しております。本書は本質的に「聖霊行伝」と呼ばれるにふさわしい書であり、初代教会において聖霊なる神様がどのように働かれたかがドラマチックに描かれています。現代の読者は、これを自分とは関係のない「過去の出来事」として遠目に眺めるのではなく、今も生きて働いておられる神様が私たちを通して同質の御業をなさることを信じ期待して読む必要があります。聖霊に満たされたとき、人はどのように変えられるか。今日の箇所では、聖霊の働きは教会内部における「持ち物の共有」という形で現れています。この出来事の意味を探ってまいりましょう。

【本論】

本論 1. 困窮の中での協力

信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。（4:32）

まず、この時に初代教会に起きていた特別な状況を理解しておく必要があるでしょう。ナザレのイエスという一人の指導者が冒瀆罪でユダヤ当局に捕えられ、ローマ総督に引き渡され、帝国への反逆の首謀者というレッテルを貼られて十字架で殺された。彼に従っていた弟子たちは、その後も危険分子としてユダヤ当局の監視下に置かれていました。

当局にとっては事実、厄介な連中でした。なぜなら、彼らは葬ったはずのイエスが死から甦ったとエルサレム中でふれ回り、ユダヤ当局がイエスに対して行なったことの不当性を暴露していたからです。そのため、イエスの復活を宣べ伝える群への迫害は激しさを増し、食料の調達すら困難であった可能性もあります。そもそも、ナザレのイエスの直属の弟子たちは皆、田舎のガリラヤ出身であり、この度の過越の祭のために都エルサレムに詣でて来ていたのですから、彼らにはエルサレムに自宅などはなく、仮住まいでどうにか凌いでいたのです。これだけ世の風当たりが強ければ新規に就職先を見つけることなどできず、今後どのように生計を立てていけばよいかという死活問題に直面していたとも言えます。だから、その群の中に貧しい人々がいたのは当然のことでした。

そのような背景を踏まえて今日の箇所を読むと、教会内で持ち物の分配が行なわれるようになった理由が十分に納得できるでしょう。34 節では「**信者の中には、一人も貧しい人がいなかった**」と言われているように、本来「貧しい人」の存在があったという事実が窺えます。しかし、貧しさの中にある人々もこの共同体の中にあっては、信者による献げ物の分配によって支えられていたのです。彼らは誰かに強制されてそのようなことをしていたのではなく、全くの自発的な愛の業として持てるものを喜んで主にささげていました。「**心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく**」(32 節)とあります。ここには物質的なものに対する所有欲から解き放たれた人間の姿がある。「私のものはすべて主のもの」と考える自由が彼らの内にあったのです。

私たち人間は地上に多くの宝を蓄えます。それは物質的なものだけではなく、能力や知識である場合もあるでしょう。それらを自分だけのものとして握りしめているとき、そこには不自由があるのかもしれない。むしろ、それらを与えてくださった神様のためにどう用いていくかという思考が与えられていくとき、自由と広がりが生じるのです。

本論 2. 使徒たちが担っていた責任 (教会の代表としての誠実な分配)

さて、33～35 節の中には、群の責任を担っていた使徒たちの二つの役割が描かれています。それは、第一に主の復活を証しすること、第二に群れの金銭管理です。

使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証した。そして、神の恵みが一同に豊かに注がれた。(4:33)

ガリラヤ出身の使徒たちこそ貧しさの中にあっただと思われそうですが、彼らは経済的に支えられて宣教の働きに勤しむことができました。そして、彼らが主の復活を力強く宣べ伝えれば宣べ伝えるほど、神の恵みは一同に増し加えられていきました。

一方、使徒たちは信者によってささげられる献金の管理も担っていました。これは、

少人数から始まった教会では当然の成り行きだったと思います。

信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足元に置き、必要に応じて、おのおのに分配されたからである。(4:34-35)

中には大胆な献げ物をする人もおり、不動産を売却してその代金をささげたという驚くべき記録があります。これはおそらく、自分が生活をしている家とは別の土地・建物を指すでしょう。未使用の状態にあるならば主のために用いていこうという判断によって、それを思い切って売却したのだと思われます。自分の生活そのものが脅かされるような献げ方が勧められているわけではありません。また、このように不動産を売却していった背景には、当時信じられていた切迫した終末観というものがあったと言われています。主イエスの復活と昇天の後、聖霊降臨があり、信徒の群は主の再臨が本当に間近であることをいよいよ信じて歩んでいたのです。もしかしたら明日にも主は来られ、世を審き、真新しい世界が開けるかもしれないという期待感が渦巻いていた。だから、彼らはもはや地上のものに対する執着心がなくなってきていたとも言えるでしょう。

いずれにせよ、使徒たちは次々と集まってくる献げ物を正しく管理し、ふさわしく分配する責任を負っていました。不正があってはならない。盗まれてもいけない。あくまでも主に対して誠実でなくてはならない。そのようなピリッとした空気が張り詰めたことでしょう。しかし、やがて使徒たちはこの分配の奉仕を別の人々に任せるようになります。それが、少し先ではありますが、6章の執事の任命です。

そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めて言った。「私たちが、神の言葉をおろそかにして、食事の世話をするのは好ましくない。そこで、きょうだいたち、あなたがたの中から、霊と知恵に満ちた評判の良い人を七人探しなさい。彼らにその仕事を任せよう。(6:2-3) 教会内での役割分担が少しずつ明確化されていきます。

本論3. バルナバの例

さて、36-37節では際立った献げ物の一つの事例が登場します。それは、バルナバという人物によるものです。

レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足元に置いた。(4:36-37)

バルナバは、9章、11章、15章にも登場してくる、パウロを使徒たちに紹介する本書の重要人物ですが、信者の間でも「慰めの子」と呼ばれるほどに人望の篤い人でした。

「慰め」と訳された言葉「παράκλησις」（パラクレシス）の原意は「傍に呼ぶこと」ですが、動詞の「παρακαλέω」は「慰める」と訳されることが多い。慰め主なる聖霊を思わせる言葉です。バルナバが聖霊に満たされた人物であり、ただただキリストを愛するがゆえに、自分の土地を売ってささげたということがここに記録されています。

バルナバについて詳しい説明が加えられています。まず、「レビ族」であったということが分かっていますが、本来レビ族というのは神殿奉仕者が選ばれる部族であり、彼らには律法の規定で土地は与えられないことになっていました。

主はアロンに言われた。「あなたはイスラエルの人々の土地の中に相続地を持つてはならない。彼らの間にあなたの割り当て地があってはならない。私こそが、イスラエルの人々の間であなたの受けるべき取り分であり、相続分である。」（民数 18:20）

しかし、第1世紀頃にはこの規定は死文化されており、レビ族に属する人々も独自に土地を所有する者が多かったと思われま

す。バルナバについてのもう一つの情報として「キプロス島生まれ」ということが言われていますが、これは彼が離散のユダヤ人であり、パレスチナ外の地で生まれ育ったことを言い表しています。キプロス島は現在も存在する地中海東部に位置する島ですが、ユダヤ人はマカベア（ハスモン王朝）時代（前168～前37年）にキプロス島に移住した者があったようです。バルナバも過越の祭の巡礼でエルサレムを訪れていたと思われま

すが、彼が売却した土地がエルサレムにあったのか、地元のキプロス島にあったのかは不明です。あるいは、彼の妻の所有地だったのではないかという説もあります。いずれにせよ、彼が行なった愛の業は特に目立ってしまうほど大きなものでした。主の霊に満たされたところに生じた一つの好例として、この出来事は記録されたのです。

【結論】

私たちが生きる現代においても、教会は経済活動によって運営されています。私たち一人びとりの主への献身によって、この共同体の歩みは支えられています。現在、2020年度決算の承認が行なわれていますが、この一年の教会としての財政状況を確認する時です。コロナ禍という異例の年となり、厳しい状況下にあります。その中でも主が一人びとりの献身を受け留め、祝福して下さったことを覚えます。そして、この時を必ず乗り越えさせてくださると信じます。私たちもまた、聖霊に満たされるとき、所有物への執着から解放された喜びを味わうことができるでしょう。そこに生まれる全き自由によって、神と人への愛の業が溢れ出ることを豊かに体験したいと思います。

【祈り】

聖霊なる神様。初代教会の信徒たちに満ち溢れたように、私たちの内にも力強く臨んでください。私たちの生き方の全体が聖霊に満たされたものとなるように。それが、隣人への心からの愛として現れていくように、導いてください。私たちの周りにいる人々の必要を知り、自分に与えられた何らかの賜物を用いて仕える喜びを豊かに味わわせてください。願わくは、私たちの人生のすべての日々がペンテコステでありますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
主イエスの昇天後、約束の御霊を世に遣わし給うた、父なる神の愛、
祈りをもって待ち望む者を、ご自身の霊で豊かに満たし給う、主イエス・キリストの恵み、
純粋な愛の発露として、各々の賜物をもって神と人ともに仕えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。